

茨城高等学校・中学校

校長室だより

2022年10月18日

ディストピア／本を焼く世界への問い

2012年に91歳で死去したアメリカのSF作家レイ・ブラッドベリの代表作の一つ『華氏451度』（ハヤカワ文庫）は、何とも悩ましい奇妙な世界を描いています。

「昇火士」を職業とする、主人公モンターグが生きる社会では、本を読んだり所持することが法律で禁じられています。もしも本を所持していることがわかり通報されると、ヘルメットに451と刻印された消火士ならぬ「昇火士」（英語のFire Manを訳した造語）たちが駆けつけ、火炎放射器を思わせる「昇火器」で家もろとも本を焼き払ってしまうのです。本は、読む人に既存の価値観への疑念や批判を生じさせ、心の平安を乱し、社会に害をもたらす、とういのが本が禁じられている理由です。ちなみに作品のタイトル“華氏451度”は紙が自然発火する温度を表しています。

1953年に書かれた作品の中でブラッドベリが描く近未来の世界では、空を戦闘機が飛び交い戦争の危機が迫っています。しかしどの国がどんな理由で戦争をしようとしているのか、作品は一切語りません。人々は“ラウンジ”と呼ばれる壁型のテレビに夢中です。それは現代のインターネットがつくるバーチャル世界を思わせる娯楽設備で、モンターグの妻ミルドレッドはラウンジでの親戚たち（仮想の）とのおしゃべりに心を奪われ、現実への興味を失っています。

いつしかそんな社会や、昇火士としての仕事に違和感を感じるようになったモンターグは、通報のあった家からひそかに本を持ち帰り自宅に隠し持つようになります。“幸福”の意味を問う、不思議な少女クラリスとの出会いの中で、モンターグは自分が求めているものが何かを意識化していきます。ある日、通報があり出動したモンターグの目の前で、本の焼却に抗議する老婦人が、本もろとも自分に火をつけて自殺します。モンターグは昇火士としての生き方に決別することを決意します。

そんなモンターグの変化に気づいた昇火隊の隊長ベィティーは、モンターグが本を隠し持っていることをつきとめ、彼の本と家を焼却します。さらにモンターグを逮捕しようとした隊長を、逆に昇火器で焼き殺して殺人犯となったモンターグは、彼の臭気情報をインプットした機械猟犬の追跡を受けながらの逃亡の旅に出るのです。

実際の歴史上でも、本を焼くという出来事は過去に何度も起こっています。最も有名なのは、秦の始皇帝が行った焚書坑儒（ふんしょこうじゆ）でしょう。戦国の六国を滅ぼし中華統一を成し遂げた始皇帝は、統治の妨げとなった儒家を弾圧します。紀元前213年、儒家の思想を記した書物を焼き、460名余りの儒学者を生き埋めにしたと伝えられてい

ます。人類史上最初の、政治による思想弾圧の例と言えるかもしれません。

『華氏451度』の新訳を手がけた伊藤典夫氏は、「あとがき」の中で1933年5月10日のナチス焚書に触れています。この日、ナチスの国民啓蒙・宣伝大臣ヨーゼフ・ゲッペルスの影響のもと、ドイツ学生連合会はドイツ語とドイツ文学の純化を目標に、フロイト、ケスナー、ハイネ、マルクスなど2万点にのぼる“非ドイツ的な”本を広場で焼却しました。ドイツの多くの大都市で学生たちによるたいまつ行進が行われ、ベルリンでは4万人の聴衆がゲッペルスの熱烈な演説に酔ったのです。

技術革新がもたらす様々なメディアの誕生によって「本」の存在意義は変わりつつあります。有史以来、長い歴史の中で、本は、大量の情報を保存し伝達することを可能にする唯一と言っている媒体でした。本がその役割を少しずつ他の媒体に譲ることになったのは、デジタル技術が長足の進歩を遂げた20世紀後半以降のことです。

インターネットは、私たちの日常に膨大な情報量と驚異的な情報伝達のスピードをもたらしました。ハリウッドのセレブカップルが破局して女性に新しい年下の恋人ができたとか、プレミアリーグでひいきのサッカーチームの不振の原因は、中心選手と監督の確執らしいとか、ボルネオのジャングルで新種のアリを発見したというニュースは実はねつ造だったとか、望めば世界中の情報を瞬時に呼び出すことのできる魔法を私たちは手に入れました。この魔法を使うには呪文も杖も必要ありません。ポケットからスマホを取り出して“ググる”だけです。

一方でインターネットがもたらす情報は、断片的、表面的なものに偏りがちだということも事実です。数百ページにおよぶ本を読むことによって得られる知見と、SNSやネットニュースのもたらす知識とでは、量的のみならず質的にも大きな違いがあります。一つの物事に対して思いを巡らせ、思考の深い淵に沈み込むとき、その傍らにあるのはデジタル媒体よりも本の方がふさわしいと感じます。スウェーデンの研究者が、小学生に同じ小説を読ませたとき、デジタルよりも紙媒体で読んだ小学生のグループのほうが小説の内容をより深く理解していた、という研究結果もあるようです。それとも、もしかするとZ世代でデジタルネイティブの生徒諸君には、もはやデジタルも紙も関係ないのでしょうか。

少なくとも、本が数千年にわたる人類の叡智を記録し、継承する役割を果たしてきたこと、その存在が現在でも人類の文明を支え、社会を動かす力を担っていることに異論のある人はいないでしょう。

昇火隊の隊長ベィティーは、本の焼却処分に情熱をかたむける一方、名著や古典に関する豊富な知識を持ち、文学や哲学への造詣（ぞうけい）の深さを感じさせる人物です。ベィティーは、まるで本への憧れと憎しみの間で分裂しているかのようにも見えます。作品中、ベィティーはモンターグに次のように語りかけます。

「学校がスポーツ選手、資本家、農家、製造業、販売業、サービス業、修理屋を世に送り出すことに熱心で、審査する人間や、批評する人間、発想豊かな創作者、賢者の育成をおこたるうち“知識人”ということばは当然のようになりしり語となった。人はいつでも風変わりなものを怖れる。(中略) みんな似たもの同士でなきゃいけない。憲法とは違って、人間は自由平等に生まれついているわけじゃないが、結局みんな平等にさせられるん

だ。誰もが他の誰かをかたどって造られるから、誰もが幸福なんだ」

「ひとつの問題に二つの側面があるなんてことは口が裂けても言うな。ひとつだけ教えておけばいい。もっといいのは何も教えないことだ。(中略)国民には記憶力コンテストでもあてがっておけばいい。ポップスの歌詞だの、州都の名前だの、アイオワの去年のトウモロコシの収穫量だのをどれだけ覚えているか、競わせておけばいいんだ。不燃性のデータをめいっぱい詰め込んでやれ。もう満腹だと感じるまで“事実”をぎっしり詰め込んでやれ。ただし国民が、自分はなんと輝かしい情報収集能力を持っているか、と感じるような事実を詰め込むんだ。そうしておけば、みんな、自分の頭で考えているような気になる。動かなくても動いているような感覚が得られる。それでみんなしあわせになれる」

2015年、文部科学省は全国の国立大学に対して「特に教員養成系学部・大学院、人文社会科学系学部・大学院については、18歳人口の減少や人材需要、教育研究水準の確保、国立大学としての役割等を踏まえた組織見直しの計画を策定し、組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むよう努めることにする」との通達を行いました。この「文系不要論」は大学や世論の猛反発をまねき、後に文科省は文系不要論は誤解であるとして釈明します。しかし、ここに“人文系の学問はGDPの成長や経済競争力の向上には役立たない。そのための予算や人材をITや工学など経済に直結する実学分野に投資すべきだ”という意図、経済優先のロジックを見てとることができるのではないでしょうか。

今年(2022年)の4月から高校の学習指導要領が変わりました。筆者が30年近く教壇に立ってきた「国語」にも大きな変更がありました。これまで数十年間、現代文・古文・漢文の3分野を基本としてきたカリキュラムの枠組みが、評論や記事など事実をあつかう文章を読み、表現活動を重視する「現代の国語」と、小説・古文・漢文など文芸的文章をあつかう「言語文化」に変更されました。細かい説明は省略しますが、文科省の定める標準単位ごとの授業をおこなったとすると、事実をあつかう文章の比重が大きく増え、文芸的分野は圧縮されます。国語という教科は、文学や古典作品を通じて人間や人生について考える教科から、社会生活に必要な実務的な国語力を養う教科へと大きく様変わりしようとしているようにも見えます。

“読む”能力に加えて“聞く・話す”“書く”能力が重視されるようになるのも今回の変更の特徴です。そのこと自体は、時代の要請にもかなった妥当なものだと思います。しかし、その影響で、限られた単位数の中で“読む”活動が削られていくとしたら懸念を禁じ得ません。読むことは思考することにつながり、個人の価値観や世界観の醸成をうながします。インプットをおこたって、いくらアウトプットの練習を積んだとしても、出てくるのがうわべだけで中身がスカスカの言葉では意味がありません。

『文学部の逆襲／人文知が紡ぎ出す人類の「大きな物語」』(ちくま新書)の中で、著者の波頭亮氏は、「産業革命以降200年以上にわたり人々を豊かにしてきた資本主義と民主主義が、ともに本来の機能を失っている」と指摘します。その状況を打開するにあたり、「社会の仕組みと方法論はテクノロジーによって基礎的条件が設定され、思想・価値

観によって設計される」と考える波頭氏が期待するのは、AIです。

18世紀後半に起こった産業革命は、人間を力仕事から解放しました。経済は拡大し、人々の生活は飛躍的に豊かになりました。生産、生活の分野を問わず情報作業全般を担うAI技術は、生産／労働様式に全く新しい段階の変革をもたらし、産業革命に匹敵するパラダイム・シフト（注1）を引き起こすことが予測される、と波頭氏はいいます。AIが社会構造にもたらす劇的な変化の中で、価値あるものとそうでないものの基準や、幸福や豊かさの意味も大きく変わっていきます。こうした新しい世界の中で、私たちはどのような豊かさを手にし、人生の意味をどこに見い出すことができるのか、「その答えを与えてくれるのが、新しい時代の姿を描き出す物語である。その姿を描き出すのは、哲学や美術、歴史や芸術といった人文の知性である」と波頭氏は述べています。

「人文の知性」とは何か。例えば新型コロナ対策を考えると、感染状況を分析して今後の拡大を予想したり、ウィルスの特徴や治療法を研究するのは、データサイエンスやメディカルサイエンスなど理系の知性の役割です。しかし、それらをふまえて、コロナにどう対処することが人々の幸福につながるのか、感染が続く中でどのような社会を構築すべきなのかを考えるのは人文知の仕事です。人文知とは、一人称による知見、「私は・・・と考える」と発信する知のあり方です。

そんな人文知を育て、鍛えるものは、歴史や文学、哲学や芸術など、「本」によって受け継がれてきた思想や文化に他なりません。歴史や文学を軽視する社会は、人々が生きる意味を見失い、自由や幸福について考えることを忘れたディストピア（注2）へと続いている、といったら大げさでしょうか。先に述べた大学改革や学習指導要領の変更が、どこか隊長ベイティの言葉に通じているような気がしてなりません。

『華氏451度』に話をもどしましょう。都市を離れて逃走するさなか、モンターグはラジオが伝える宣戦布告のニュースを耳にします。どの国がどの国になぜ宣戦布告をしたのかは不明のままです。本を焼く社会への抵抗を企てる人々の協力のもと、機械猟犬の追跡から逃れたモンターグの頭上をジェット機が通過して戦争が勃発します。

『「あ、あれ！」モンターグが叫んだ。／そして戦争がはじまり、その瞬間に終わった」』
ジェット機が投下した核爆弾を思わせる強力な兵器に、都市は一瞬で灰燼（かいじん）と化します。世界中でどれだけの都市が減んだのか、どれほどの人間が、何が起きたのか理解する前に灰となったのかもわからない破滅的戦争が世界を襲ったことが、作品中で示唆されています。衝撃波にひっくり返りながら、モンターグは、都市に残した妻ミルドレッドが瓦礫（がれき）に埋もれていく幻を見ます。そして、今まで思い出そうとしても思い出せなかった彼女との出会いを、二人が遠い昔にシカゴで出会ったことを思い出すのです。

人文知を否定し、本を焼く世界は、戦争の炎によって焼かれ、壊滅します。それは、戦争や暴力について考えることを拒んだ世界が迎えるべくして迎えた終末なのかもしれません。国民には“事実”を詰め込んでおけばいい、それでみんな自分の頭で考えているような気になるのだ、というベイティの言葉が、悪魔の預言のごとく、恐ろしい響きをともなあってよみがえるようです。

19世紀のドイツの詩人ハインリヒ・ハイネは、その作品の中で「本を焼く場所では、やがて人間も焼くようになる」という言葉を残しています。『華氏451度』には、文芸作品からの引用が多数用いられていますが、この言葉自体は見当たりません。しかし、幼いころから“本の虫”だったブラッドベリは、この言葉を知っていたと考えるのが自然でしょう。

私たちが生きる、この21世紀の日本で、私たちの気づかないどこかで“本が焼かれ”てはいないでしょうか。

注1) パラダイム・シフト…その時代の人々のものの見方・考え方を根本的に規定している概念が、枠組みごとに移り変わること。

注2) ディストピア…ユートピア（理想郷）の対義語。反理想郷、暗黒郷。自由や平等、真実、ヒューマニズムなど、良いとされるものが否定された世界。

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。